

CINEX Web Journal



第12号

発行日 2023年12月1日

★ 異文化と明治期の日光

村松 英男

異文化と明治期の日光

宇都宮大学大学院地域創生科学研究科博士後期課程 村松英男

明治時代に日本に暮らす欧米人のほとんどは特権階級の人々であった。当時の異文化そのものともいえる欧米人の日本滞在をイメージすると、各地に汽車鉄道が開通するまでの移動手段は馬車鉄道と人力車や椅子駕籠であったと推測され、まるで腫れ物に触るような扱いをされていたと考えられる。彼らにとって、常に発生する異文化との接触や、北西ヨーロッパにはない夏の極度の蒸し暑さと蚊からの逃避は不可欠であった。いわゆる、中世ヨーロッパ文学における「ロクス・アモエヌス」（「心地よき場所」）が必要であったことは想像に難くない。

1890年前後になると、蚊のいない、夏の涼しい気候を求めて、奥日光で外国人による別荘の建築が始まった。最盛期には、大使館や外交官の別荘が、中禅寺湖畔に四十棟以上建てられていた。その名残が見られるのが、中禅寺湖畔西六番地である。かつて、トーマス・グラバーの別荘があったところで、今では、暖炉のみが残っている。グラバーは、故郷・スコットランドでのトラウト・フィッシング（マス釣り）の風景を重ねて、私財を投じ、湯川にマスを放流した。また、当時の駐日公使であったアーネスト・サトウは、ジョサイア・コンドルから助言を得ながら、個人の別荘（後に英国大使館が買い上げた）を中禅寺湖東湖畔に新築した。現在でも、英国大使館別荘記念公園として、整備され、現存している。イザベラ・バードは、「日本の未踏路」執筆のために来日した際には、ヘボン師からの紹介で金谷カテッジイン（現・金谷ホテル）に滞在し、好印象を記している。また、1879年にイギリスに帰国した後にも、大旅行の途中に数回、静養先として日本に立ち寄り、中禅寺湖畔にあるサトウの別荘で心地よい時を過ごしたことを記している。他に、中禅寺湖東湖畔には、フランク・ロイド・ライトの弟子でチェコ出身のアントニン・レーモンドの設計により、イタリア大使館別荘記念公園（写真）が整備され、現役で使用されているフランス大使館別荘とベルギー大使館別荘とともに現存している。

水上飛行機が飛んだり、外国人滞在者によるヨットレースが開催されたりするなど、当時の奥日光は夏季の一大社交場となり、いつしか「夏の外務省」といわれるようになった。山（男体山）と湖（中禅寺湖）の美しい風景と、夏の涼しい気候に、静謐な湖面に沈む夕日の美しさが加わり、中禅寺湖東湖畔は北西ヨーロッパの人々にとって母国の風景に似た「ロクス・アモエヌス」として、villa（別荘）を建てるのに珠玉の場所であった。このことが、今日でもこの地が異文化の夏のリゾートとして静かな人気を呼ぶ所以なのである。



イタリア大使館別荘記念公園（筆者撮影）